

# 送別の辞 青山治郎教授の退職にあたって

佐藤勝彦

札幌大学文化学部教授青山治郎先生は、本年三月、めでたく定年をお迎えになりました。

青山先生は昭和八年五月、北海道小樽市にお生れになりました。まだ幼少の頃に、会社員であられた父君の転勤によって東京に移られ、以後約四十五年間を東京およびその周辺で過されました。その間、昭和三十三年に明治大学文学部史学地理学科を御卒業になり、昭和三十八年には明治大学大学院文学研究科史学専攻博士課程を単位取得満期退学され、翌年四月に保善高等学校の教諭として専任教員生活のスタートを切られたのであります。さらに昭和四十七年以降は母校明治大学文学部の講師を兼任されています。

昭和五十七年四月、先生は札幌大学女子短期大学部文化学科の新設に伴って教授に就任し、ゆくりなくも出生の地北海道に戻られることとなり、以後十五年間にわたって女子教育に精魂を傾けてこられました。そして平成九年四月、女子短期大学の国文学科と文化学科の改組転換によって開設された文化学部に移籍されることとなったの

であります。

歴史学者としての青山先生には、その寡黙の内に秘められた深い洞察力と生産的な懷疑や批判力、そして学問に対する貪欲なまでの探究心に対して、常に畏敬の念を抱かされて参りました。

青山先生の御専門は、中国・明王朝の時代に征討と首都北京の防衛のために組織された常備軍団である京営についての研究が中心となっています。これは先生の若い頃からの一貫した研究テーマでありました。先生は夙に明朝の京営が持つ歴史的意義に着目され、従来あまり研究が進んでいなかった京営の実態を明らかにすることは、勿論それ自体に大きな意義があり、またこの研究によって明王朝の兵制全般についての解明を進めて行く上で、延いては王朝の統治の本質や財政の様態を知る上で、重要な示唆を数多く得ることができると考えて、この研究に進まれたとのことであります。先生はまた「中国専制王朝の本質を解明するためには、その兵制の研究が極めて重要である。また明代については歴代皇帝の実録が現存し、『皇明経世文編』をはじめとする奏議集やその他さまざまな文献が比較的豊富に残っており、京営の制度について相当に精細な考証が可能だとの見通しを持つことを得た。これも私をして京営の研究へと踏み切らしめた理由の一つであった」と述べておられます。先生の学風は堅実且つ緻密な考証の上に立っており、膨大な史料の中から京営についての記事を丹念に捜収し、これに基いて史実を考えて行くという、息の長い作業の積み重ねによって、京営の形成の過程とその後の変遷のあとを明らかにされてきました。これらの研究の一端は、『明代京営史研究』にまとめられ、刊行されています。

また先生が相当な蔵書家であることも早くから一部の人々の知るところであります。聞くところによれば先生はその多くの蔵書の中から、養父であられた故青山公亮博士所蔵の朝鮮史関係を中心とする書籍多数を本学の図書

館に寄贈されたということです。

趣味の世界としての先生の読書の幅の広さは誰しも脱帽するところでありますが、ことクラシック音楽の鑑賞についても先生は知る人ぞ知る存在でありました。バロック音楽から現代音楽まで幅広く楽しまれ、とりわけドイツの古典派からロマン派にかけての作品を好まれているとのこと、クラシック音楽の深遠な世界へのその傾倒ぶりは、研究者としての姿勢にも一脈通じるところがあるのかも知れません。蛇足ながらそのオーディオ・システムにはマッキントッシュ、タンノイやガラードなどの外国製品を使用されているとも聞いております。

先生は御退職の後も札幌大学のある西岡の地にお住いになり、散歩や読書やレコード鑑賞などを楽しまれる生活の中で、今迄手がけてこられた仕事の「跡始末」を進めて行かれる御所存と伺っております。

二十二年にわたった本学における先生の研究者・教育者としての業績に深く敬意を表わすとともに、常に大学や学部の発展を心にかけてこられた先生の志を受け継いで行くことをここにお誓いするものであります。

先生にはなお一層御自愛の上、悠々自適の研究生活をお続け下さいますように。先生の御健康と御清福を心からお祈り申し上げて送別の辞と致します。